

古典研究会 研究発表

連載

# 是為論これ ろん な～是を論と為す～⑨

## 李亦畬と「老三本」(その1)

前月号までの発表のうち、是為論①⑤⑧で「老三本」のことについて少し触れました。武式太極拳二代目継承者の李亦畬が1881年にまとめ上げ、のちに「老三本」と呼ばれるようになった要訣集のことです。太極拳研究とその発展に大きく貢献し、現在では流派の垣根を越え学びの糧となっています。太極拳を学ぶ者の聖典と言われる『太極拳経(王宗岳太極拳論)』は、「老三本」によりその存在が公になりました。今回の発表では「老三本」継承の流れや、書いた李亦畬の功績についてご紹介します。

### <代々受け継がれ、のちに公開された要訣集>

「老三本」は、李亦畬による手書きの3冊の要訣集です。うち1冊は李亦畬保管の「自蔵本」で、親族に受け継がれ出版はされず、一部の研究者以外は目に見ることができません。弟の李啓軒に渡した「啓軒本」と、弟子の郝為真(郝和)に渡した「郝和本」は、李亦畬の死後、時代を経て子孫などによって印刷物として公開されています。「啓軒本」は、李啓軒の孫の李福蔭の手に渡ったあと『廉讓堂太極拳譜』と称し、1929年より友人や太極拳愛好者に多数贈られました。この時代、中国は政情不安のさなかにあり、武術で心身を鍛錬し国難を乗り越えようという機運が高まっていました。1932年には山西省国術促進会が結成され、李槐蔭(李亦畬の孫)が幹部に就任しています。1935年には李福蔭や李槐蔭により「啓軒本」の流れを汲む『李氏太極拳譜』が出版されました。現在「啓軒本」の原本は散逸したようですが、これら李氏関連の拳譜は現存しているようです。

「郝和本」は、郝為真の親族が受け継ぎ、1960年代には孫の郝少如が出版しました。その後も時代を経るなかで幾度かの再版を繰り返しています。

1982年には武術家で太極拳研究者の顧留馨氏が、自身の著書『太極拳術』に「郝和本」の画像を掲載しました。

### <李亦畬の功績>

李亦畬(1832～1892年)は名が経綸、字が亦畬で河北省永年県生まれ、勤勉で文学や医学にも精通していました。22歳からは体を鍛えるために、李啓軒とともに叔父で武式太極拳の始祖武禹襄から武術を学び始め、20年以上に渡って鍛錬を続けました。李亦畬が武術を学び始めた頃、(のちに太極拳と呼ばれる拳術の)合理的な教えを体系的に示した要訣集はありませんでした。李亦畬の最大の功績は、武禹襄の実践と理論の教え、そして『太極拳譜』、並びに自身の研究成果まで含め、1冊30ページ以上にわたる手書きの3冊の要訣集としてまとめ上げたことです。



李亦畬1832～1892年

この中には複数の文献が収められており、いくつか武禹襄の作とされるものが存在します。ただし武禹襄は正式な署名入りの文書を残しておらず、李亦畬がのちに武禹襄の書付や口伝を整理して記録したと考えられます。「老三本」は、文武両道で知識階級だった武禹襄や李亦畬の研究の集大成として、後世にまで影響を与える理論書となりました。実は武禹襄は「老三本」完成の前年(1880年)に、甥の李亦畬と李啓軒に技を託して亡くなっています。「郝和本」に収蔵されている『太極拳小序』は、武術の技の解説ではなく李亦畬のプロローグです。そこには「老三本」完成前に亡くなった武禹襄への追慕や、技を継いでいく決意のようなものが見て取れます。具体的には、太極拳の起源に思いを馳せる言葉とともに、武禹襄の拳術修行の経緯や、武禹襄から自分が伝授された教えを忘れないよう『五字訣』として書き記すことなどが書かれています。

李亦畬は、理論研究を進める際、周囲の人達の協力を仰ぎ、積極的に技の精度を試しながら実戦性を検証し、何度もメモを取り、それらを壁一面に貼っては何度も書き換え、修正を重ねたそうです。彼の思案の日々は生涯続き、人生の40年ほどを武術の研究に費やしました。

※今回は、～李亦畬と「老三本」(その2)～と題し、「老三本」の内容の一部をご紹介します。